

「おらツもつと腰ふれえつ
そんなんじや全然
ちんぽにこねえぞ」

「へりッこの変態ごもめッ
毒を見せ物にしおつて…
必ず後悔させてやるぞ…ッ」

アッ
♡

アッ
♡

「くだらねえ事言つてねえで
とつとまんこみせる」

「クエスト帰りで溜まつてんだ
もつとサービスしろッ」



「ふっほっこれごめかろっミ
春の腰振りを見てさっさと
射精するが良いッ」

「さっさと元魔王の情けない姿
そそるなッおれ受け皿持つてさっ
とアレやらせよっせ」

「なんだっ受け皿……ッ」



「よし今からその器を
満タンにするまでしよんべんしろ」

ビクッ♡

「なッ何を言っているッの、
何故そんな事をしなければ
ならないのだッ」

「肉便器にやらせる事に
理由なんてあるわけねえだろ
満タンにしなきゃ
牢屋に戻れねえからな」

「そもそもこんな量出るわけ
ないだろうッ」

カラッ



「おいおい全然足りてねえぞ
もつと出せっ」

「あつ無茶をいうな……ッ
もつもう全部出きってしまったわッ」

「つたくしようがねえな
マン汁は垂らせる癖に
しょんべんも出せねえのか」

「オラもつと腰を突き出せ」

「なっ…何を…」



「おほおツ♡♡♡♡」

「オラツ情けねえまんこの為に
手伝つてやつてんだツ
雑魚膀胱働かせるツ」

ビクッ♡

ビクッ♡

おツ♡

おツ♡

「びぎッまッまッ
急にまっかき回されたらッ
おおおッあッツイッツイッ♡♡」

「いんせえんっつとんてん」

ガッポッ
グッグッ
グッ♡

ガッ♡

ガッ♡

—
—
—
—



「チツもう出なくなりやがった
まだ半分も満たせてねえぞ
どうすんだ」

「あーッおほ…ミ…
そ…そんな事…言われても…ミ
出んもんは…出ん…ミ…」

「ゴッ
ゴッ
ゴッ」

「ホッ
ホッ」

「ハイッ」

「チヨワロ」

「ガッ」

「指じや刺激が足りねえつてか
ちんぽ中毒の魔王らしいな」



「おっおっちっちんほ入れられても
無いものは出っ出なっおっ♡♡」

「それを出すのが肉便器の
仕事だろっがッオラッ
今から作っつて即失禁しろッ」

「っっおっおっもんなのッ
無理に決まっつているだろっ
うおっおっツイツイグツイグ♡♡」

「潮出せるなら尿も出せるだろッ
精液出してやるからやる気だせッ」

ビクッ

ビクッ

おっ

うっ

んっ

パッ

ガッ

ガッ

パッ

パッ
パッ



「お…ほ…ツ…ツ
もう空のはずなのにな…出る…♡♡♡
おあ…イグツ…ツ♡♡♡」

「やりやあ出来るじゃねえか
全員で相手してやるから
その調子でまき散らせてけよ」

ビュッ♡
お♡♡♡

フイ♡♡

ガッ♡

ドボボ♡

ガッ♡

ガッ♡



数時間後

二



「おーし大分溜まったな
最後の仕上げだ二気に引き抜くぞッ」

「おほっ…お…まッ…まこ…ッ
いッ今…引き抜かれたら…ッ♡♡♡♡」

「いッイキ死んでしまう…♡♡♡♡」
「ガッ♡♡♡♡」

「ガッ♡♡♡♡」

「グッ♡♡♡♡」

「ビッ♡♡♡♡」

「ゴッ♡♡♡♡」

「フッ♡♡♡♡」

「ハッ♡♡♡♡」

「ふざけんな途中から二滴も
出さなくなりやがつて
死ぬほどのイキ刺激じゃねーと
出ねえんだろ？」

「大体肉便器の為に待つわけねえだろッ
オラツアクム死ねッ」



「おお出た出たまるでまんこから
射精してるみてーだな」

「でもこれじゃ精液と混ぜらって
溢れたか分かんねえな」

「しよらがねえから器変えて
もう一回最初からやらせてやるよ
感謝しろ肉便器」

ビクッ♡
ビクッ♡
ビクッ♡

ゴッ♡
ゴッ♡

グッ♡
グッ♡
グッ♡

ガクッ♡
ガクッ♡
ガクッ♡

「おッほ…ッおお…ッ
そんな…また…こんな量…
はひ…ッまたイグ…ッ♡♡♡♡」

